

# 第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『「ばちがあたるよ」』

群馬県

美景

「ばちがあたるよ」

美景 (みけ)

だあれも見ていないと思っても、  
後ろからぼそと、おばあちゃんがつぶやく。

「ばちがあたるよ」

うわっ、怖い。まるで忍者みたい。一体どこから来たの、いつの間じ？

幼い私は恐れおののいて今開けたばかりの鍋の蓋をそおつと元に戻す。我が家の掟、つまり食いは厳禁。でもおばあちゃんはその後たいてい「味見するかい」って一口食べさせてくれた。兄や弟がまだ外で遊んでいておやつの時間に戻ってこないとき、お腹をすかせた私がこっそり戸棚を開けて勝手に菓子にお菓子を手を伸ばそうとしても。やっぱり「ばちがあたるよ」って。どんな時だっておばあちゃんの目はごまかせない。そのあとおせんべいくれたけど。しょっぱかったなあ。

「ばちがあたる」ってどんなこと？ いろんな恐ろしいことが起こるのか、幼い私には想像もつかなかったけれど、おばあちゃんの何とも言えない恐ろしげな顔といつもととは全く違った別人のような雰囲気、これはちよつとまずいぞと刷り込まれた心は、そのあと半世紀近く強い効力を発揮し続け今に至る。この年になるまであまたの誘惑に負けず、悪事に手を染めずにまっとうにやっけてこられたのは、この言葉があったからこそと思う。落としものは交番に、だれも見えていなくとももちろん落書きなんかしたことないし、あ、でも若い頃ポイ捨てくらいはしちゃったことあったかな。

今にして思うと、「ばちがあたるよ」って言葉にはおばあちゃんの思いがぎっしりと詰まっていたのではないだろうか。

誰かがきつとあなたを大切に見守っているよ。あなたをちゃんと見ていて、ずるしちゃだめだよ、しっかりやれよ、がんばれよって応援してくれているんだよ。その誰かを、決まてがっかりさせてはいけないよ。おばあちゃんの「ばちがあたるよ」には、そんな意味が込められていたのではなからうか。

私が六歳の時に脳溢血で倒れた父親は、何か月か入院して七歳の時に亡くなった。三人の子供を抱えて大黒柱として仕事をしなくてはならなかった母親は、常に忙しくろくに話す間もなかった。かわりに私を見守り続けたおばあちゃんはその度いちいち説明はしなかったけれど、幼い私に様々な思いを込めて「ばちがあたるよ」って言い続けたんじゃないだろうか。小さい頃は口やかましくて恐ろしい、うっとうしいだけの存在だったけど、今にして思う。私の人生最大の「推し」はやっぱりおばあちゃんだ。絶滅危惧種の真正正銘のおばあちゃんだ。

ふと、思う。今この日本で、子供をしつげるときに「ばちがあたるよ」っていう言葉を使う人はいったい、何人くらいいるのだろうか。そもそも、そんな言葉を聞いたことないよっていう若いお父さんやお母さんのほうがたくさんいるのじゃなからうか。

今、五十八歳の私の周りで少しずつ孫の誕生を祝う友人が増えている。誰もかれもすらすらと美しく、若くて優しい。タレントみたいにお化粧してネイルしてハイヒールでメイクばつちりで。おばあちゃんなんて絶対に呼ばせない、ファーストネームでそのまま「○○ちゃん」とか、せこそ「はなぶさ」。

でも私は正真正銘のおばあちゃんになりたい。私の推しの働き者で強くて優しいちよつとしようばいおばあちゃんになりたい。幸い、三か月前に正式におばあちゃんデビューできた。仙台に暮らす長男夫婦にかわいい赤ちゃんが誕生したのだ。続けてもう一人、うれしい予定の知らせも入った。東京で暮らす娘夫婦は年末に赤ちゃんを迎えるという。

私は私の推すおばあちゃんみたいになつて、「そんなことをしたらばちがあたるよ」って言うてみたい。まだ善悪のはつきりしない、無邪気な幼い行動の中に潜む小さな悪事の種を見つけて、孫の心の中に善いことをする心を、悪いことから離れる心を育みたい。あなたは誰より大切に、どんなときでも誰かにしつかり見守られ、愛されているんだよって、厳しいけれどもあたたかい私の大好きな言葉で何度も何度も語り掛けて、教えてあげたい。私がそうしてもらったように。